



**Data**

監督・脚本: 佐藤信介  
 原作: 原泰久『週刊ヤングジャンプ』(集英社)  
 出演: 山崎賢人/吉沢亮/長澤まさみ/橋本環奈/本郷奏多/満島真之介/阿部進之介/深水元基/高嶋政宏/要潤/橋本じゅん/坂口拓/宇梶剛士/加藤雅也/石橋蓮司/大沢たかお/阿見201/一之瀬ワタル

## 👁️👁️ みどころ

漫画とバカにしてはダメ。現在まで刊行された原泰久の『キングダム』53巻は、中国の春秋戦国時代を舞台に、大將軍になるという夢を抱く戦災孤児の少年・信と、中華統一を目指す若き王・嬴政を壮大なスケールで描くもの。すると、それを実写映画化すれば、『始皇帝暗殺』(98年)、『HIRO (英雄)』(02年)や、かつて勝新太郎が主演した70ミリの超大作『秦・始皇帝』(62年)にも並ぶエンタメ超大作に！

まずは、影武者、替え玉、双子の“仕掛け”に、なるほど、なるほど！また、異母兄弟による兄弟の確執と対立にも、なるほど、なるほど！しかして、原作の1～5巻までをまとめた本作の本筋とクライマックスは・・・？

嬴政と“山の民”との同盟はいかにも漫画チックだが、全編を通してキーマンになるのは、いかにも一匹狼的で謎めいた王騎將軍。本作で兄弟ゲンカのケリはついたが、「この国のかたちは？」と問う王騎に対する嬴政の答えは・・・？

以降のシリーズでは、「始皇帝暗殺」に至るまでの、秦王・嬴政の前向きの国づくりの実態をしっかりと見せてもらいたいものだ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■あの『キングダム』が実写版で映画に！こりゃ必見！■□■

2006年1月から『週刊ヤングジャンプ』で連載が開始された原泰久の『キングダム』は、私も時々本屋で立ち読みしていた大ヒット作。時は紀元前、中国春秋戦国時代を舞台に、大將軍になるという夢を抱く戦災孤児の少年・信と、中華統一を目指す若き王・嬴政(後の秦の始皇帝)を主人公とし、多種多様な実在と架空の人物を登場させて、壮大なス

ケールで描くものだ。現在までに単行本が53巻刊行され、累計発行部数3800万部超を記録したそうだから、すごい。そんな壮大な原作の映画化、しかも実写化はとてもムリ。長い間そう考えられていたが、今般ついにそれが実現した。

秦の始皇帝を描いた中国映画の名作には、『始皇帝暗殺』(98年)、『シネマ5』127頁)、『HIRO(英雄)』(02年)、『シネマ5』134頁)があり、邦画では、勝新太郎が始皇帝を演じた70ミリの超大作『秦・始皇帝』(62年)がある。本作はそんな正統派実写版の始皇帝ではなく、あくまで漫画「キングダム」を実写化したものだが、さてその出来は？ 何はともあれ、こりや必見！

## ■□■時代は春秋戦国(BC770~221年)！舞台は秦！■□■



日本には15世紀末から16世紀末にかけて戦国時代があったことはよく知られているが、中国に春秋戦国時代(BC770年~221年)があったことは、きちんと「中国史」を勉強した人でなければ知らないはず。そんな人には、『シネマ5』のプロローグ①「坂和的 中国映画鑑賞の視点あれこれ」(14頁)、とりわけ、その「第3 坂和的 地図から見る中国映画」(27頁)が参考になるはずだ。そこには、①中国全図、②北京映画マップ、③戦国七雄形勢図、④西安地区主要歴史都城位置図があるので、その③と④を転載しておく。それらをきちんと読めば、春秋戦国時代に中国を割拠していた七雄とは秦、韓、燕、齊、趙、魏、楚で、その中の秦は最も西方の国だったことや、有名な唐の長安の都ができる前の、秦の時代の都「咸陽(かんよう)城」の規模やその時代背景が理解できるはずだ。

『始皇帝暗殺』のキーマンは、言うまでもなく暗殺のために秦の王、政に面会を求めた荊軻。司馬遷の『史記・刺客列伝』の中で、「壯士 ひとたび去って ふたたび還らず」とうたわれて有名になった人物だ。そして、もう1人のキーマンが、コン・リー扮する趙姫。政と趙姫はもともと政が趙の人質になった幼い時代からお互い魅かれ合っていた仲だ



地図④ 西安地区主要歴史都城位置図

が、戦乱の時代は2人を引き裂いたばかりか、荊軻に助けられた趙姫は“ある決断”を！『始皇帝暗殺』はそんなメチャ面白い映画だったが、本作はその後七国を滅ぼし、はじめて中国大陸を征服した始皇帝が登場する少し前の秦王、政の若き日の物語だ。したがって、舞台は中国の最西方にある国、秦に限定されている。本作は『週刊ヤングジャンプ』に連載された『キングダム』と題された漫画だが、中国にはそんな歴史の時代背景があることを、まずはしっかり勉強しておきたい。

## ■□■主人公は信と漂だが、実は信と嬴政！■□■

冒頭に登場するのは、信（山崎賢人）と漂（ひょう）（吉沢亮）という2人の少年。冒頭では、この2人が、奴隷に生まれたり一生奴隷、奴隷の身分から抜け出し、天下の將軍になるためには強くなるしかない。そう考え、2人が共に武芸の鍛錬に励む姿が描かれるので、それに注目！

奴隷の信が、ある日目にした王騎將軍（大沢たかお）は当時の六大將軍最後の將軍で、その日以降、信が目指すべき“理想の將軍像”になったわけだが、ハッキリ言って、この冒頭の描き方は所詮マンガだ。つまり、ローマ帝国時代では『スパルタクス』（76年）で描かれたように、奴隷の立場は生まれた時から奴隷とハッキリしていたが、中国の春秋戦国時代に、それと同じような奴隷制度があったわけではない。したがって、この信と漂の叫びは悲痛なものだが、所詮マンガ的。また、「強くなりたい！」は、いつの時代でも男がのし上がっていくための一つの動機だから、それはそれでいいのだが、山の中で師匠なしで棒切れを振って2人で鍛えあっても、所詮その伸びは知れているのでは？宮本武蔵だっ

て、単なる暴れん坊で終わってれば、歴史に名を残すことはなかったはずで、沢庵和尚と出会って、姫路城の天守閣にあった「開かずの間」に3年間も閉じこめられ、書物を読んだことによってはじめて武術家（剣術家）としても大成できたわけだ。もっとも、その点、マンガも映画も便利な芸術だから、信は一生懸命鍛錬しているうちに、誰よりも高く飛び上がる技術を身につけたようで、真上から剣を突き下ろす剣法を見つけたようだ。ある意味これは、去る3月8日に亡くなったデストロイヤーの「4の字固め」や、眠狂四郎の「円月殺法」のような必殺剣（必殺技）になるのかも・・・。

それはともかく、この冒頭から導入部においては、荒げずりな信に対して、漂の冷静さが光っていたが、ある日2人が鍛錬している姿を王都の大臣である昌文君（高嶋政宏）が目にしたところから、漂には王都に召し上げられるという思わぬ運命が舞い込んでくる。漂は「王都に行くのなら、信も一緒に」と願い出たが、それは却下。なぜなら、王都が漂を必要としたのは、秦王・嬴政（えいせい）の“影武者”としてだったからだ。なるほど、なるほど。ちなみに、勝新太郎主演の黒澤明監督の『影武者』（80年）では、武田信玄に雇われた信玄そっくりの男は影武者になるため厳しい訓練を課されていたが、さて漂は・・・？

## ■真の主役が登場！その男は嬴政。これぞ後の始皇帝！■

「潜水艦モノ」は面白い。それと同じように「影武者モノ」や「双子モノ」、「そっくりさんモノ」も面白い。それが私の持論で、前述した『影武者』はもちろん、アラン・ドロンが怪傑ゾロを双子の兄弟役で熱演した『アラン・ドロンのゾロ』（75年）やレオナルド・ディカプリオがルイ14世とその双子の弟フィリップの二役を演じた『仮面の男』（98年）も面白かった。『影武者』はタイトルだけで「影武者」を主題にしていることが明らかだったが、『アラン・ドロンのゾロ』も『仮面の男』も双子の兄弟がいることはストーリーの途中で突然明かされるところがミソ。つまり、そこまでは導入部で、そこから本来のストーリーが始まっていくわけだ。

しかして、本作ではある日、王都に召し抱えられたはずの漂が、息も絶え絶えの状態で信の家に戻ってくるシークエンスで、2人の永遠の別れと、漂の無念の思いを受け継いだ信の更なる決意が示される。そこで、漂は信に対し「お前に頼みたいことがある。今すぐそこに駆け！お前が羽ばたけば、俺もそこにいる・・・。信！俺を天下に連れて行ってくれ・・・」と言いながら、血まみれの手握られていた、ある丘に建つ小屋の地図を信に手渡したが、さてこれはナニ？ここら辺りでは、今の邦画の“説明調の強さ”にうんざりさせられるし、信のオーバー気味の演技にもひっかかる。しかし、これは今後シリーズ化される場合を含めて、信の「将軍になりたい！」という気持ちの源泉になるものだから、ある程度は仕方なし。また、漂を追ってきた軍勢によって漂の遺体が発見され、村人たちも全員殺されてしまったのも仕方ないが、この軍勢は一体誰？そして、漂はなぜ殺された

の？ここら辺りになれば、ある程度ストーリーの推測がつかはずだ。この窮地を逃れた信は、漂から受け取った剣と地図を握りしめながら目的地に着いたが、そこで信の目に飛び込んできたのは漂だったから、ビックリ！こりゃ、一体どうなってるの？ 他方、そこで漂そっくりの男の口から出たのは「お前が信か」。つまり、そこにいたのは王座を奪われ、王都を追われた秦の若き王、嬴政（吉沢亮）だったわけだ。それを知った信は激怒し、嬴政に切りかかったが、その時、嬴政の前には暗殺者・朱凶（深水元基）が登場！さあ、信はどうするの？そして、嬴政は？

## ■□■本作も根本問題は兄弟の確執と対立！■□■

兄弟の確執と対立が国の対立に結び付くケースは多い。2月9日に観た『アクアマン』（18年）も根本問題は兄弟の確執と対立だった。それと同じように、本作でも戦国七雄のひとつである秦国では、兄・嬴政と弟・成蟜（本郷奏多）との確執・対立に伴う成蟜のクーデターによって、嬴政はその首をとことん狙われていたらしい。もっとも、兄弟の確執と対立といっても、本作の2人は異母兄弟で、成蟜が「俺の方が正当！」と根拠にしていたのは、母親が卑しい女にすぎない嬴政に対して「俺の母親は王家の女だ」ということ。たしかに、それもひとつの理屈だが、成蟜の王としての能力は如何に？

成蟜に仕える宰相は竭氏（石橋蓮司）、武官は魏興（宇梶剛士）。わがまま放題で、性格もいかにも偏狭そうな成蟜も含めて、これらの登場人物の能力は未知数だ。また、成蟜が嬴政の首をあげるため暗殺者として派遣した、朱凶やムタ（橋本じゅん）をみても、結局、信にやられてしまったから、所詮その実力はイマイチ・・・？他方、嬴政に従う將軍は、今は昌文君一人だけだが、この男の能力は・・・？

本作中盤からクライマックスにかけては、これらたくさんのキャラがそれぞれの役割を果たしていくので、それはあなた自身の目でしっかりと。

## ■□■“山の民”との同盟は如何に？これもかなり漫画的！■□■

目下、クーデターによって国を追われた嬴政には、自前の軍隊はなし。付き従う將軍も昌文君1人だけ。そんな嬴政はこれからいかに成蟜に対して反撃を？そこで登場してくるのが“山の民”。それを率いる山界の王が楊端和（長澤まさみ）だ。

「三国志」では蜀の国を建てた劉備玄德は、諸葛孔明の勧めに応じて南蛮の国を攻め、「七縦七擒（しちしょうしちきん）」「孟獲七度捕えて七度放つ」の格言（三国時代、蜀の諸葛孔明が敵將の孟獲を捕らえては逃がしてやることを7回繰り返した末に、孟獲を心から心服させたという「蜀志」諸葛孔明伝・注の故事）の通り、孟獲を帰順させた。私は2004年11月28日から12月5日の“雲南省大周遊8日間の旅”で、かつての蜀の都、成都よりずっと南西にある西双版纳（シーサパンナ）、昆明、麗江、大理を観光したが、そこは當時は南蛮の土地だったもの。しかし、いくら何でも、そこに住んでいた人たちは本作にみ

る“山の民”ほど異様ではなかった。もっとも“山の民”がこれほど異様に映るのは仮面のためで、仮面を取って1人ずつの素顔を見れば、楊端和はホントは美しき山の王だ。

導入部で信の逃亡を手助けする河了貂（橋本環奈）は山の民の末裔だが、これも自称“戦闘服”を脱ぐと実はかなりの美女。まあ、原作マンガで“山の民”をどんな風に描いているのかは知らないが、実写映画化するについてはここまでマンガ的にしなくても良かったのでは・・・？私はそう思うがそれは人それぞれで、本作では嬴政が信や河了貂と共に“山の民”の本拠地に入り込み、そこで新たな同盟の必要性を訴えるストーリーに注目したい。去る3月9日に観た「NHKスペシャル 昭和 激動の宰相たち」では、吉田茂が1951年にサンフランシスコ講和条約を結び、岸信介が1960年に日米安保条約を締結する姿が描かれていたが、本作にみる嬴政と山の民の楊端和との間の（軍事）同盟はどう位置づけられるの・・・？本作後半からクライマックスに向けての展開をみると、辺境の地とはいえ曲がりなりにも安定した王国をキープしている山の民が、目下何の力もない嬴政に対して一方的に軍事援助をする同盟のように思えるが、楊端和が嬴政や信の訴えに応じて同盟を結んだのは一体なぜ？それはそれとしてしっかり考える必要がある。

## ■□■役割分担は？戦略は嬴政！武闘は信！■□■

源平の戦いに勝利した平清盛が、宋との貿易に目を付けたのは卓見！また、戦国時代の弱小大名にすぎなかった織田信長が「天下布武」という概念（理想）をイメージし天下に知らしめたのもすごい。さらに、坂本竜馬が描いた統一国家日本がすごければ、自前の船団を率いて海外貿易に乗り出す夢を描いたのもすごい。しかして、本作では最西方の1つの国の若造に過ぎない嬴政が、秦国の兄弟争いに勝とうとしているのはそれ自体が目的ではなく、中国全土を統一し中国初の皇帝になるためだ、という夢を描いていたのはすごい。信の夢は将軍になること。そしてそのために必要なのは武芸を鍛錬することだと考えていたが、これはある日、王騎將軍のかっこ良さに惹かれたためだけだから単純なもの。それに対して、嬴政がそんな夢を描くことができたのは、やはり嬴政が平清盛、織田信長、坂本龍馬と同じような天才だったためだ。それはともかく、本作後半からは嬴政が山の民の楊端和と組んだ数千名の軍勢による咸陽攻略作戦の展開がクライマックスになるので、それに注目！

咸陽（かんよう）の都は今はないが、西安は昔の唐の長安の都の一部。他方、北京の故宮は昔のままだし、清の都だった瀋陽の故宮も昔のまま残っている。そして、日本人なら誰でも「天安門広場」の大きさにビックリすると同じように、北京の「故宮」の大きさにもビックリするはずだ。しかして、本作の撮影に使われたのは、中国の浙江省寧波市の象山県にある象山影視城。そこには春秋戦国時代の宮殿を再現したオープンセットがあるらしい。本作のクライマックスとなる咸陽の王宮での戦いは、スタッフだけで約700人、兵士役のエキストラはのべ1万人で撮影したらしい。そこで、嬴政自らは囿となって大軍

をひきつけ、その間に信が成蟻のもとに急行するという作戦を立案したのは嬴政だ。司馬遼太郎の『坂の上の雲』では「黄海海戦」に続く「遼陽会戦」で騎兵を率いた秋山好古は、“虎の子”の騎兵を本来の役割である“突撃”に用いることをせず、自らの騎兵旅団に歩兵・砲兵・工兵を加えた秋山支隊を編成し、騎兵はもっぱら情報収集に使ったが、それが大正解だった。つまり、日本の騎兵を創設した彼は、“虎の子”の騎兵を突撃という本来の役割に使えば、それだけで使い果たしてしまうリスクが強いため、情報収集のみに使い、戦闘中は馬に乗らず、ひたすら動かないで我慢して耐え忍ぶという戦法に徹したわけだ。

本作のクライマックスでは、それと同じように、嬴政と山の民、楊端和の少数の部隊が、多くの成蟻の軍の攻撃をとにかく耐え忍ぶ姿が描かれるのでそれに注目！そして、その間に真の敵、成蟻のもとに向かった信は、成蟻が飼いならず、人ならざる姿をした巨漢・ランカイ（阿見201）や、凄腕の剣豪・左慈（坂口拓）らの大敵を何とか一人ずつ討ち取りながら、やっと成蟻の元へ。こうなると、宰相の竭氏には何の力もないから、彼はあっさり斬られてしまったが、さあ、最後の兄弟対決は如何に？

## ■□■キーマンは王騎将軍！？シリーズの今後は？■□■

ハリウッドでは、ヒット作のシリーズ化が続いている。『アクアマン』（18年）もシリーズ化されるだろうし、英国人作家フィリップ・リーヴの原作を映画化した『移動都市 モーター・エンジン』（18年）も、ピーター・ジャクソンの原作を映画化した『ロード・オブ・ザ・リング』3部作（01年、02年、03年）、『ホビット』3部作（12年、13年、14年）と同じようにシリーズ化されるはずだ。しかして、原泰久の原作は現在までに全53巻が刊行され今も連載中だが、本作もヒットすればシリーズ化は必至！？

プレスシートにある『キングダム』原作者 原泰久×プロデューサー 松橋真三のスペシャル対談によると、原泰久氏は16巻までの映画だろうと考えていたが、松橋氏は1～5巻で十分映画化可能と判断したらしい。そのため、本作では導入部にもかなり時間をかけて丁寧に描かれている。

本作でも、シリーズ全体を通して主人公はあくまで信と嬴政だが、ストーリー構成のキーマンは王騎将軍だ。プレスシートでは、彼を「六大将軍最後の1人で得体の知れない人物」と紹介しているが、シリーズ第1作たる本作を観ていると、良くも悪くもそれがよくわかる。彼が成蟻に謁見した時は昌文君の首を差し出していたが、後にこれがれっきとしたニセモノだったとわかるから、王騎はかなりしたたかな男だ。ところが、本作ラストでは、少数で成蟻を打ち破った嬴政の力量を試すかのように、司馬遼太郎風に言えばお前の考えている“この国のかたち”は如何？と問いかけるから、この男は面白い。そして、それに対する嬴政の答えに納得したようだから、さあ今後の王騎の立ち位置は・・・？

こうなると、否が応にもシリーズ第2作への期待が高まっていくことに。

2019（平成31）年3月16日記